

琉球大学学術リポジトリ

グローバル・プログラム津梁 プロジェクト報告：
多様性・協働性を核とした国際通用性のある体系的
な学士教育の確立に向けて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2018-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 當間, 千夏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41086

グローバル・プログラム津梁 プロジェクト報告

～多様性・協働性を核とした国際通用性のある体系的な学士教育の確立に向けて～

當間千夏（グローバル教育支援機構開発室）

1. 背景

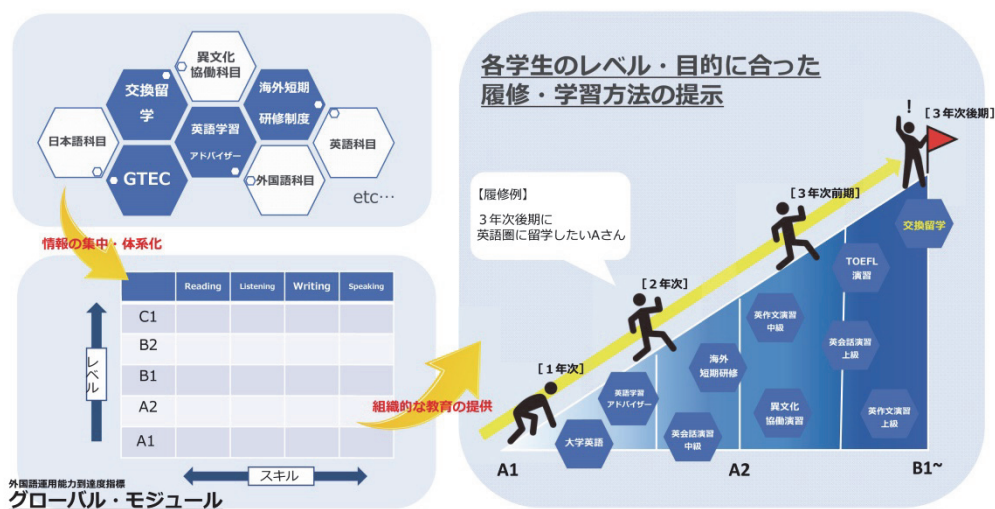
グローバル化・ボーダレス化した知識基盤社会において、国が他の国との関わりを持たず独立して存在することは困難である。そのような社会で、大学は国際的に通用する精神・スキルを持った人材の育成・輩出を保證することを求められている。

平成 20 年度に中央教育審議会が答申した「学士課程教育の構築に向けて」では、国際的に通用する高等教育の質の保証が大学の重要課題として挙げられた。それを受けて、本学では平成 21 年度より学士課程教育の質保証プログラム「University of the Ryukyus Global Citizen Curriculum (URGCC)」を構築、7つの学習目標（自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性）を掲げ、21 世紀型市民、すなわちグローバル市民の育成・輩出に向けた学士教育を実施してきた。

2. 概要

本事業「グローバル・プログラム津梁」は、URGCC の学習目標の核となるグローバル市民の育成を集中的に担う事業として平成 29 年度より開始した。本事業では、学内に点在しそれぞれ独立して行われてきた外国語学習・異文化体験・留学などの取り組みを、外国語運用能力到達度指標（グローバル・モジュール）を基盤として可視化・体系化することで取り組み間の相互連携を可能とし、学生のレベルや目的に応じて各取り組みを組み合わせさせた講義履修・学習・渡航の流れを提示するなど、組織的なグローバル市民育成の仕組みづくりを行う（参照：図表 1）。

グローバル・プログラム津梁：グローバル人材育成加速化事業



(図表 1)

併せて学際・国際協働教育プログラムを構築・実施する。日本人学生と留学生、地域産業界と本学学生、他学部学生同士など国籍・機関・学問分野を超えて協働する機会を提供し、未知の価値観や文化、生き方の多様性を受容し協働することのできる精神・スキルを育成する。

3. これまでの取り組み

(1)情報の集中・組織化・可視化

本事業は平成29年度4月より開始し、グローバル・モジュールを基盤とした外国語教育・異文化理解教育・異文化体験の体系的・有機的運営に向けて、これまで学内でそれぞれ実施されていた外国語教育・異文化体験に関する活動についての情報を「一元化・組織化・可視化」する取り組みを開始した。

具体的には、5月より共通教育で提供される英語以外の外国語科目の担当講師に向けてグローバル・モジュールの説明を行うとともに各講義の達成目標をリスニング調査し、モジュールの枠組みに配置する取り組みを実施している。

(2)グローバル・コモンズ津梁

学内に点在している外国語教育・異文化体験に関する取り組みやその情報を集中・可視化するための場として平成29年4月より附属図書館2階に「グローバル・コモンズ津梁」を設置し、運営を開始した。これまで各学部の教室など別々に実施されていたため見えづらかった取り組みを、全学から学生の集まるランドマークである附属図書館で実施することで、取り組みを可視化することを目的としている。

本スペースは、平成29年4月から9月までの間で、留学奨学金説明会、英語アドバイザー講義、海外文化研修事後研修、語学サークル等による約60件の活用があった。実施されていた英語アドバイザーの英会話クラスを近くで見ていた学生がクラスへの参加を希望する事例もあり、取り組みの可視化が学生の学びの機会提供につながることを示している。

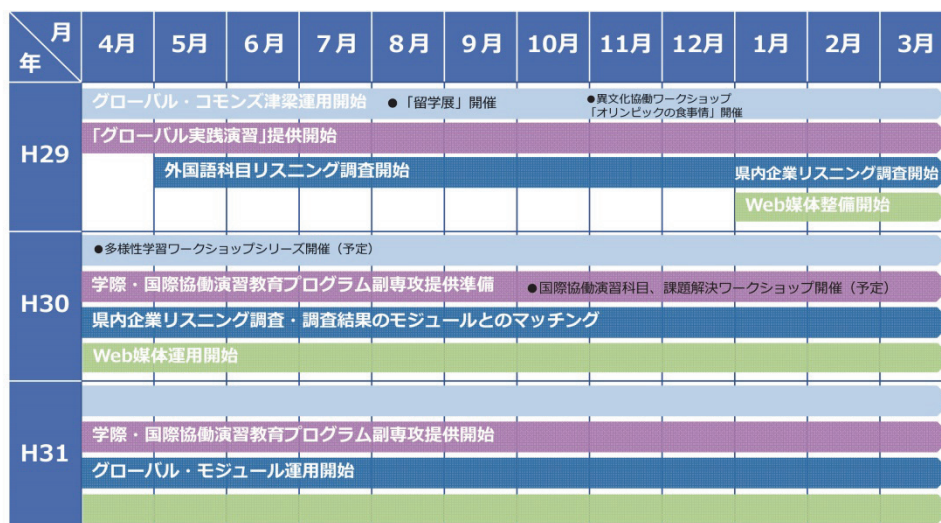
(3)高大接続

平成29年7月のオープンキャンパスでは、将来の琉大生をターゲットとして現役高校生に向けた留学フェア「海外展」を開催した。「海外展」では、本学入学後に可能な留学の形態や多様な経歴を持つ留学経験者の声、奨学金情報等を紹介することで、将来本学に入学する可能性を持つ高校生に対して大学入学以前の段階から大学入学後の海外渡航について考える機会を設けた。早い段階で情報を得られれば得られるほど海外渡航のチャンスは増えるため、「海外展」は将来の本学学生の海外渡航の可能性を広げるきっかけとして重要な意義を持つと言える。

(4)学際・国際協働演習、地域連携

「多様性を認識し受容する」学生を育成する学際・国際協働演習教育プログラム構築に向けて、平成29年度前学期より英語を中心とした日本人と留学生の協働科目「グローバル実践演習」を開始した。今後は更に異文化協働科目の数を増やすとともに、地域産業界とも連携した課題解決ワークショップを実施し、社会に求められるグローバル人材の育成に取り組むことを検討している。

H29-H31年度 グローバル・プログラム津梁タイムライン



(図表 2)

4. 今後の展望

今後グローバル・プログラム津梁では、講義以外の異文化理解・外国語教育活動・交換留学などのグローバル・モジュールの枠組みへの配置、グローバル・コモンス津梁の全学への周知、交換留学・奨学金・外国語教育情報を画一化するウェブ媒体の整備など、学内における国際教育・異文化体験に関する取り組み・情報の集中を引き続き実施し、体系的なグローバル人材育成体制の構築を目指す。併せて地域産業界・地方自治体や太平洋島嶼地域特別編入学プロジェクトと有機的に連携しながら異文化協働科目や課題解決ワークショップを定期的に打ち出し、「多様性を受容する」協働教育プログラムの遅滞なき拡充に努めたい。